

- 1 派遣期日 平成23年11月12日(土)
- 2 研修先 学校名 筑波大学附属中学校
所在地 東京都文京区大塚1-9-1
<http://www.high-s.tsukuba.ac.jp/jhs/>

3 研修内容

(1) 講演 「言語活動の充実」を行うことの意味

横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター 教授 高木 展郎

○要旨

- ・「学力は時代によって変わる」という認識が重要である。知識の習得と再生から、思考力・判断力・表現力の時代になっている。「考える」こと、コミュニケーション能力の育成が必要。
- ・学習指導要領改訂で充実すべき事項の第一は、各教科等における言語活動の充実である。学習指導要領総則には「各教科の指導にあたっては、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童生徒の言語活動を充実すること」と示されている。
- ・学力としての思考力・判断力・表現力の育成には次のような活動が重要である。
 - ①体験から感じ取ったことを表現する
 - ②事実を正確に理解し伝達する
 - ③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
 - ④情報を分析・評価し、論述する
 - ⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
 - ⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる
- ・発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある。国語科以外の教師が、その必要性を十分理解することが重要であり、指導計画に言語活動を位置づけて授業を改善する必要がある。
- ・言語活動を行うこと自体が目的ではない。あくまで、各教科で育成すべき学力を、言語活動を通して行うことである。
- ・これからの時代に求められる学力 Reading Literacy＝PISA型「読解力」を育成するためには、思考力・判断力・表現力を育成すること。「受信する→考える→発信する」＝「聴いて→考えて→つなげる」授業＝言語活動の充実
- ・「一人で学ぶ」ことがあって「学級の他者と関わって学ぶ」に意味が出る。考える時間を保証し、自己の考えをもたないうちに、答えを要求しない。
- ・学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるようにする。学んだことをメタ認知することを通して、自分自身の考えの変化や深まりに気づかせる。
- ・「表現」の評価の観点は、考えたり判断したりした過程や結果を、説明・論述・討論などの言語活動の中でどのように表出しているかを内容とする。
- ・言語活動の充実を図るためには、各教科の目標や学習内容、評価の計画などの改善が重要である。

(2) 公開授業参観

- ① 国語(1学年) 単元名「書くことと考えること」 指導者 飯田 和明

ア 単元設定に関わる課題意識

人が言葉を使って文を書く、そのさまざまな形を経験し、振り返ることで、書くことと考えることを結び付け、書くことを〈言語活動の構成〉において認知することによって、生徒各自の言語生活の向上につなげたいと考えた。

イ 身につけさせたい国語の力

- ・文を書いたり書き換えたりしながら思考を高める力。
- ・書くことを言語生活の中に位置づけ、用いていく力。

② 理科（1 学年）

単元名「大地の変化」 本時の主題「化石とは何か」 指導者 金子 丈夫

ア 単元設定の趣旨

大地の表層で起こっている現象―地震、火山活動、流水の作用など―を正しく理解させることと、地層の広がりや堆積物が地層となる過程、火山の噴火する時間の長さ、プレートの動きなど、時間認識や空間認識を養うことをねらいとした。

イ 本時のねらい

- ・化石の観察を行わせ、化石は生物の残したあとであることを理解させる。
- ・いくつかの情報から、化石とはどのような特徴をもったものかを説明させる。

③ 理科（2 学年）

単元名「生物・生命とは何か」 指導者 新井 直志

ア 単元設定の趣旨

1 年次の「細胞」「植物のなかま」「動物のなかま」の学習と、2 年次の「植物のからだのつくりとはたらき」「動物のからだのつくりとはたらき」の学習をもとに、「生物」に共通する特徴を考え、「生物とは何か」を定義することを目標とする。

イ 本時のねらい

- ・生物には、植物、動物、細菌類、菌類があることを知る。
- ・生物のからだは、細胞からできていることを思い出す。
- ・「生きている」とは、エネルギーを使用することであることを理解する。
- ・呼吸とは、エネルギーをつくり出すはたらきであることを理解する。
- ・生物の特徴として、子孫を残すことや成長することを指摘することができる。

④ 授業参観での生徒の様子

どの授業においても、生徒が今学習している内容や活動についての見通しをもって取り組んでいる様子が見られた。ねらいをきちんと理解して個人で考える場面、近くの人やグループで話し合う場面などで、自然なコミュニケーションが図れていた。司会者がリードして順番に話すなどという形式に縛られず、話し合いが成立するところに関心した。積極的に話をしない生徒でも、他の人の発言に耳を傾けて自分の考えを見直しており、グループでの学びが身についていると感じた。まとめの段階では、他の意見を聞いて、もう一度自分たちの意見を見直しより良いものにしていくという活動があった。生徒は、これらの言語活動を通して学習を深めることができていた。

4 感想

「言語活動の充実」については以前から言われていることであるが、国語科以外の教師にとっては、まだまだ研修が不足している現状だと思う。言語活動を「話す・聞く・読む・書く」ととらえると国語科の内容と思われがちだが、日本人が苦手としているコミュニケーション能力を高めることであり、他者に対して自分を表現すること、つまり、自分で考えて答えを判断し、それを相手に分かるように伝えることであると思う。今日の講演や公開授業でも強調されていたのは、思考力・判断力・表現力の育成の大切さである。それは単なる話し合い活動ではなく、生徒一人一人が自分の考えをもつことから始まるものである。そのためには、学習のねらいを生徒自身が理解していることが重要であり、それと同時に課題を解決するための基礎的能力を備えていることが必要であると思う。

今後は、どの教科領域においても、生徒が自分から考え、それを友達に伝えることによって深めていけるような活動を取り入れていきたい。単元の構成を見直し、どの場面でどのような言語活動を取り入れるとよいかを考える必要がある。生徒が自分の考えを説明したり、文章として表現したりできるように指導するとともに、まとめの段階での学び合いを大切にしたい。友達の意見を聞き、自分の考えと比べて、さらによい答えを導き出すといった学習が身につくよう、各教師が言語活動の大切さを共通理解して取り組むことが大切であると思う。